

# 湘南慶育病院

症例概要 患者 : 40代男性

病名 : 右脳幹部出血

入院期間 : 150日間

## 【経過】

X月Y日、会社に出勤後、勤務中に左半身の脱力を自覚。妻に電話し救急搬送。頭部CTにて右中脳を中心とした出血像を認め、降圧管理のもと保存的加療にて経過観察となった。X月Y日+3日後に右上肢から始まる全身性の痙攣があったが薬物療法にて落ち着かれる。X月Y日+14日後にリハビリ加療目的で当院に転院される。

## 内 容

### 【症例紹介】

病前の生活は妻、娘3人と5人暮らし。化粧品の輸入代理店会社を経営しており一家の大黒柱。転院時は意識レベル低下し、発話困難であったため頷きやジェスチャーを交えてコミュニケーションを図っていた。身体機能は、左上下肢重度麻痺、両上下肢の失調症状を呈していました。基本動作全般は最大介助を要しており、協力動作も認められなかった。病棟内の移動は車椅子全介助にて実施。身辺動作全般に全介助。排泄はバルーン対応。入浴は機械浴全介助で行っており、リハビリ以外の時間はベッド上で過ごされることが多かった。本症例の社会的立場や年齢を考慮し、退院後は社会参加が継続出来るような支援が重要であった。その為、ADL自立、社会での役割の獲得、機能障害に対し代償手段を身につけることが求められた。

### 【チームアプローチ】

転院当初の短期目標を「軽介助でのADL動作獲得」とした。PTでは基本動作の介助量軽減、移動手段の獲得に向けて、下肢・体幹のコントロール、起立着座練習、座位立位バランス練習、介助下での歩行練習、免荷装置を使用しての歩行練習を積極的に実施。OTではトイレ動作や更衣等の身辺処理獲得、社会復帰に向けて、上肢機能練習、上肢ロボットを使用しての自主トレ、トイレの実動作練習、更衣動作練習、wordを使用したタイピング練習等を指導した。STでは言語でのコミュニケーション獲得を目標に、口腔機能訓練、構音訓練を実施した。2ヶ月経過後、目標達成に至り社会復帰にむけ

て、「①ADL動作の自立②会社内役割の獲得」と目標を上方修正し、残りの3ヶ月で自宅での生活に向けて実用的な移動手段の獲得を目指した。病棟生活でもADLの向上・セルフケア促進のために具体的な対策を多職種で話し合い、病棟Nsと連携して日中のADL動作を見守りで行ってもらう様に務めて頂いた。

### 【症例の変化】

入院時から、1ヶ月目には基本動作の介助量が軽減、平行棒内での歩行練習が可能となり、食事では太柄スプーンを使用し摂食が可能となった。2ヶ月目からは寝返り、起き上がりは軽介助、起立・移乗は手すり使用して軽介助で可能となった。また制動付き歩行器を使用しての歩行練習を開始した。トイレ動作、更衣は軽介助で実施できるようになった。食事は自助具箸を使用し全量摂取可能となった。3ヶ月目からは基本動作は見守りで可能、歩行練習もフリーハンド歩行1人中等度介助で可能となった。病棟ではNs付き添いのもと歩行器でのトイレ動作や食堂までの移動が開始となり軽介助～見守りで実施。更衣動作も軽介助～見守りで可能となった。構音機能も聞き取りは問題無いレベルとなった。4ヶ月目からは基本動作は遠位見守り。車椅子での病棟内移動も自立となった。歩行練習ではフリーハンド接触介助で実施。トイレ動作・更衣は遠位見守りとなった。パソコンでのキーボード操作も時間はかかるが短文を打てるようになり、家族に感謝の気持ちを手紙にして伝える事が出来るようになった。退院時にはADL動作が自立にて行えるようになり、食事動作も普通箸を使用して摂取可能となった。今後の社長としての役割を一部取り戻す為に、アドバイザーとして化粧品の選定やパソコン操作が行えるようになった。